

翻訳

## A. A. ミルン『名誉ある平和』〈2〉

A. A. Milne *Peace with Honour* (2)

著：A. A. ミルン

A. A. Milne

訳：吉村 圭

Translation: Kei Yoshimura

鹿児島女子短期大学

Keywords : A. A. Milne, Pacifism, First World War, English Literature

キーワード : A. A. ミルン, 平和主義, 第一次世界大戦, 英文学

### [訳者解題]

本稿では『くまのプーさん』(*Winnie-the-Pooh*)の著者として知られるA. A. ミルン(Alan Alexander Milne)が書いた、戦争と平和に関する論考『名誉ある平和』(*Peace with Honour*)6章から8章までの翻訳を行う。<sup>1</sup>

本稿で扱う6章から8章では、主に本書の副題(an Enquiry into the War Convention)にもある戦争というものが行われるに至る「慣習」が議論の中心となる。「戦争への慣習」(The War Convention)と題された6章では、庭の破壊をする侵入者の寓話が描かれている。その中では、仮に自身がその庭をこよなく愛する所有者で、その侵入者による破壊を阻止する唯一の手段が偶然手元にあった爆弾を投げることであったときに、家族もろとも爆弾で庭を爆破するかどうかという問いが投げかけられる。通常はそのようなばかげたことをするものなどいるはずがないのだが、しかしそれを実行に移すのが、「感傷にとりつかれた愚か者たち」(sentimentally obsessed idiots)であるとミルンは指摘する(44)。この寓話は当然のことながら、他国による侵攻とそれへの反撃という戦争の比喩になっており、ここで言われる「感傷」とは、戦争やそこでの死に対して「英雄」や「名誉」といった言葉で語られるときに呼び起こされる感情のことを指している。日本でも戦国時代の刀と刀で体をぶつけあう戦いのあり方が英雄的でロマンチックな行為として語られることがあるが、本書で言及されているように、同様の価値観が少なくともポーア戦争まではイギリスにもあったようである(49)。ミルンはこの「感傷」こそが習慣的に繰り返されてきた戦争の1つの要因であると考えていた。ミルンは庭の寓話によって、庭を破壊されることに対する「本能的な武力の利用」(instinctive use of force)ではなく、例えばその侮辱行為

に対して自身の面子が保たなければならないという、決闘の時代から脈々と受け継がれてきた「慣習的な武力の利用」(conventional use of force)こそが戦争を誘発するものの正体だと指摘しているのである(40)。

そして7章では、戦争へと若者たちを駆り立てる号令として利用されてきた多くの詩の一節を引き合いに出しながら、その「感傷」がこれまでの歴史の中で戦争を正当化してきたと述べている。ミルンは第一次大戦を「ほとんどコミカルといってもいいほどに非英雄的なもの」(almost comically unheroic)(52)と捉えている。第一次大戦における兵士たちは、英雄のように戦場で壮絶に散ったのではなく、その多くは負傷や毒ガスの後遺症に苦しみながら、しかしベッドの上で死んだのである。1千万の戦死者のうち、800万人は、次に犠牲になるのが自分ではなく自分の戦友であってほしいと願いながら、「英雄的なことを成し遂げる前に殺されてしまった」(did nothing before they were killed)(53)という。しかしそれでもなお、彼らの死は終戦記念日の度に繰り返し行われるの祈りやスピーチ、勲章、あるいはこの章で繰り返し引用されるホメロスの「国のために死すことは甘美にして望ましいもの」という一節によって美化され、神聖化される。このようにして第一次大戦における死は、英雄的と語られてきた過去の戦争と同様に美化され、その美しき死への「感傷」によって、地獄を経験したはずのヨーロッパは同じ過ちを繰り返そうとしている。ミルンはここでこのような警鐘を鳴らしているわけである。

1940年、ミルンは『名誉ある平和』への補足として小冊子「名誉ある戦争」(War with Honour)を執筆した。その中でミルンは、自身が『名誉ある平和』を書いた目的について「読者たちに、先人の目を通した伝統的戦争観では

なく、現在の戦争を自分自身の目で見てほしかった」(I wished my readers to look at modern war with their own eyes, not at a tradition of war through the eyes of their ancestors) (6) と語っている。<sup>2</sup> また『名誉ある平和』の10章では、勇敢な物言いで戦争について雄弁に語る者たちこそ、望めばいくらでもその機会があったはずなのに戦争で死ぬことがなかったものたちだと皮肉を込めて述べている(100)。このように、自身で戦争を体験していないものたちが、「感傷」によって美化された戦争について語り、そしてそれが繰り返されることをミルンは恐れていたのである。

ミルンは自身の具体的な戦争経験について多くを語った作家ではないが、7章3節では、その戦争体験の一端を覗き見ることができる。そこでは同じ連隊の部隊に参加するために、一緒にフランスへ行くことになった物静かな青年兵士について書かれている。この青年は両親から持たされた防弾チョッキを身につけるべきかどうかを悩んでいたのだが、結局それを着ていようがまいが関係はなく、彼は連隊合流前に敵軍の爆撃によって粉みじんに吹き飛ばされてしまったという。戦場を直に経験したミルンに、このようにあっけなく戦死した大勢の戦友がいたことは想像に難くない。そしてミルンは「自分自身の目で」目撃したその戦友たちの死を、覚悟を持って「コミカルといってもいいほどに非英雄的」だったと表現しているのである。そして

その覚悟とは、彼らの死が美化され「感傷」に訴えかける道具として、次の戦争に利用されないようにするための覚悟なのである。

ミルンはこれまで英文学研究史上重視されてこなかったきらいがある。そしてこの『名誉ある平和』もまた、一部のミルン研究者を除けばあまり語られることはなかった。しかし本書は平和主義者として第一次大戦という人類史上最初の歴史的事件を経験し、それが二度と繰り返されないよう願った作家が書いたものであり、それは当時を生きた人間の精神を示す重要な資料としても評価することができるのである。ここに邦訳を掲載することで、ミルンの当時の願いが現代というこの時代に広く知られるための一助となればと考えている。

#### [解題注記]

- 1 本稿では『名誉ある平和』の初版 (Methuen, 1934) を元に引用、翻訳を行う。『名誉ある平和』の概要については拙訳『名誉ある平和〈1〉』の「訳者解題」にて詳しく述べている。
- 2 「名誉ある戦争」は第二次大戦下に書かれたものである。この中でミルンは、ナチスの支配に置かれることは戦争よりも悪しき状態として、ナチスとの戦争を支持している。邦訳については拙訳「名誉ある戦争」参照。

#### [本文]

### 名誉ある平和

#### 6章 戦争への慣習 (The War Convention)

##### 1

私は戦争を、目的を達成するための「慣習的な武力の利用」であると述べてきた。平和主義者は一般的に、いかなる状況下においてもいかなる武力の使用をも認めない腰抜けの生き物と思われている。そして往々にしてこのように挑戦的口調で問われるのだ。もしナチによって英国が侵略され、お前の母親がレイプされるとしたらどうするのだ、と。どうして年老いた母親たちがその侵略者たちにとって特別に(むしろ驚異的にとでもいうべきか)魅力的に見えるというのか、私にはわからない。また、そのような状況下で熱心な軍国主義者であれば何ができるというのかもわからないし、戦争の最中の警報が鳴り響く中、どうして彼が母親のそばにいられるというのかもわからない。しかし私がもっともわからないのは、なぜその問いが平和主義者だけに向けて発されるのか、ということなのだ。私はこう仮定すべきだったのだ。レイプは戦争の副産物であり、そ

れは侵略側の兵士たちにとってほとんど自然の恩恵ともいうべきものなのだ。そして熱心な軍国主義者はおめでたいことに、戦争を受け入れるときには、他人の母親ばかりがレイプされるという見込みを立てているのだ。そのため、この問いを受けるべきは、平和主義者ではなく、むしろ軍国主義者のほうなのだ。そして修辭的にはなく、本当の興味をもって、それを問うべきなのだ。しかし(私が予想したとおりに)その軍国主義者が自身の母親と他人の母親との間にはっきりとした区別をし、そしてレイプが行われるのを受け入れるのが特殊なことではなく、むしろ一般的で愛国的な行為であると仮定してみよう。その時彼は本能的に武力を用いることで、自身の母親がレイプされるという大惨事を避けようとするのだろう。そして少なくとも、平和主義者の中には彼のその行為に対して賛辞を送るものもいることだろう。

しかしその平和主義者が賞賛するのは本能的な武力の利用という特殊な例に対してなのだ。私が主張してきたよう

に、戦争とは、今では馬鹿げたものになってしまったあらゆるきっかけへの習慣的な武力の利用なのだ。

次節の寓話は、まったくありそうもないような話なのだが、私ができる最も明快な形で、この「本能的」と「慣習的」の違いを示すことができる。

## 2

ある庭を所有するものがいた。彼はその庭から大きな幸福を得ていた。彼は年中その庭で楽しんだが、何より5月の初め頃が気に入っていた。というのも、その時期にはチューリップが花開き、そしてそれがその庭のもっとも美しい瞬間だった。冬の間中、彼は5月に到来するその美しい景観を楽しみに過ごした。長い冬の間中、彼は葉が芽吹くのを待っていた。春の気配がし始めるころには、花壇がゆっくりと模様を作り上げるさまを見ていた。彼はいつでも、その瞬間瞬間に彼の庭が名誉ある完成に近づいており、庭は今も彼の至上の喜びとなる、あふれんばかりの色彩に満たされているのだと自分自身に言い聞かせていた。

しかし、そこへ侵入者が現れた。その侵入者は庭を、あるいはその庭の所有者を嫌っていた。あるいは美しいもののすべてを嫌っていたのだ。ある4月の午後に、彼は庭に入り込み、花壇を踏み歩き、チューリップの新芽をことごとく切り裂いてしまった。庭の所有者はいすに横たわり（それはとても心地の良いあたたかな昼下がりがだった）そして、その男が彼の庭を行き来しつつ、その約束された庭の美しさをことごとく破壊しているのを見ながら、自分は何をすべきかを考えていた。

彼はどうするだろうか。彼がすることになるであろうことを、順に考えてみよう。

そういう類の人であるならば、彼はその侵入者に反対側の頬を差し出し、極めて平和主義的な態度を示すのかもしれない。彼は自分自身にこう言い聞かせたかもしれない。この哀れな男は明らかに人生にほとんど喜びを見いだせずにおり、そしてようやく自身を楽しませる方法を見つけたのだから、行儀よくその行為を中断することなどできないのだ、と。そしてこのようにいうのかもしれない。「失礼ですが、後ろに見落とされたい一対のチューリップがまだあるようです。まだまだこうべを高くしています。さあやっておやりなさい。」そしてチューリップの庭が破壊されつくしたら、彼は次に岩づくりの庭がその行為にとって有益な場所だろうと教えてやるかもしれない。

あるいは論理的思考の持ち主で、さらに武力の使用は問題外だと考える人物であったならば、彼は理性の効果を信じて試みるかもしれない。「さあよろしいですか」と彼はいうだろう。「一緒に語らしましょう。我々のカードをすべてこのテーブルに並べて。ほら、私の片方の手には、ま

ごうことなきチューリップの庭の所有者のカードがあります。実際、いまだにあのチューリップが芽吹くことになった球根のレシートだって持っていますし、あなたの視察に備えて喜んで作りましょう。そしてもう片方の手には、まどうことなき強力な腕っぷしとマラッカ杖のカードがあります…。」そして議論をしている間にもう1ダースのチューリップの芽が刈り取られてゆくことになるだろう。

あるいは彼が法を遵守する市民であるならば、個人間に正義が行われていることを確認するのは国家の仕事であると確信し、家に飛び込んで村の警察に電話をするかもしれない。しかし警察が到着するころには、侵入者は破壊行為を完遂し、とくに立ち去っていることだろう。もし彼がそういう類の人物であるならば、さらなる法の加護を利用することが可能だ。その敵に対して行動を起こし、彼の花が甚大な被害を受けたことを主張することが可能なのだ。というのも、その男を不法侵入の容疑で起訴することができるからなのだ。しかしなんということだろう！ そんなことしたところで、チューリップのつぼみは返ってこないし、いかなる賠償金も5月が彼にもたらしたであろう美しさをこれっぽっちも補うことはできないのだ。

そのため彼が本当に庭を愛しているなら、上に述べたいずれの手段も選ぶことはないだろう。

しかし、それではほかに何ができるのだろうか。

彼がしたいと思うことは、彼の本能がそうせよと命じることは、やるべき価値があると思える唯一のことは、その侵入者に立ち向かい、殴って殴って殴りつけ、それから地面にたたきつけ、蹴って蹴って蹴りつけることなのだ。そして彼の庭の境界線まで蹴り進めたら、その男をつまみ上げ、やってきた方角へ向かって投げ飛ばすことなのだ…。

しかし（偶然にも）彼はそうできなかった。というのは、彼は不運にも最近足をいためたばかりで、庭の日当たりのよい場所で横になって、動くこともかなわず、望みなくチューリップが破壊されるのを眺めざるをえなかったのだ。しかしまったくもって望みがないわけではない。というのも彼の傍らの机の上には（なぜかなど考えないでほしいのだが、もし必要ならば、彼の2人の小さな子どもたちが、それをごみ山で見つけてそこに置いておいたことにしよう）起爆可能な爆弾があるのだ。彼はただ留め具を抜いて、それを芝生越しに数ヤード投げる。そうすれば侵入者による破壊は収まることだろう。

収まるとは、すなわち、侵入者が関係する範囲においての破壊行為は収まるのだ。しかしいうまでもなく、爆弾それ自体による破壊は庭の大部分に対しても有効に働き続ける。

それは侵入者を木っ端みじんにするだろう。

それは庭の所有者も木っ端みじんにするだろう。

そしてこのエキサイティングな訪問者の影でぺちゃくちゃとおしゃべりをしていた彼の2人の子どもたちをも木っ端みじんにするだろう。

それではこの所有者は爆弾を投げるだろうか。

思い出してみしてほしい。これは彼ができるゆいいつのことなのだ。この不当で非道な行為、恐るべき暴力、この忌まわしき侮辱…これらに対して彼ができるゆいいつの方法なのだ。

彼は爆弾を投げるだろうか。

もちろんそんなことはしないだろう。

人としての感覚をもち、結末まで考慮できるものであれば、今日を生きるすべての人は、爆弾を投げるができるだろうか。

### 3

しかし我々は次のような狂気の世界を空想することができる。その狂気の世界では、現実の人間ではなく感傷にとりつかれた愚か者たちが暮らしているのだ。その世界では爆弾を投げるのが英雄的行為と考えられているのだ。その世界では、そんな侮辱に耐えるくらいなら、チャムリーの誇りにかけていかなる犠牲を払ってでも、自身の男らしさを守り抜くことのほうが重要だと考えられるのだ。我々は狂気の世界を思い浮かべることができる。そこでは結果は取るに足らないものと思われているのだ。その世界では、ある人の行為に伴い破壊が、他者の死が、自身の犠牲が、八つ裂きにされた子どもたちの体が、そしてその妻の嘆きが、これらのすべての犠牲が、その行動に伴う男らしさとか気高さ、栄光といったものの前で、取るに足らないものと思われているのだ。この狂気の世界では、その伝統に反旗を翻した臆病者たちがあざ笑われる。このような嘲笑の言葉、その響きを聞くことができるのだ。

「爆弾を投げないというのなら、君は何をするというのかね？ 何もしないのか？ ねえ君、自尊心というものはもってはいないのかい？」

「もちろん、私だって子どもたちを八つ裂きにはしたくない。あなたと同じくらいにはね。だけど、現実と向き合わなければならない。この今日という時代のこの世界では…。」

「いずれにしても、そんな風に自分を犠牲にするには勇気が必要であることを認めなければならぬだろうね。」

「ええ、そんなことに我慢ができるものなどいやしないということを明確にしなければ、それはつまり誰だって人の庭に侵入してそれを滅茶苦茶に破壊することができるのですからね。」

「その通り。それはおぞましいことではあるが、世界というやつはおぞましいことで満ち溢れているんだ。あの通

りにあふれている子どもたちをためしてみようよ。」

「結局のところ、癌で死ぬよりいいのかもしれない…」

「しかし、ちくしょう。誇りってものを持っていないのか？ チャムリーの名誉は君にとっては何の意味も持たないのか？ 君はそこでごろんとして、不屈きもののワトソンのやつが君の庭に侵入していくのをじっと見ているというのか？」

などなどと続くのだ。

これこそが、感傷にとりつかれた、戦争の伝統が花開く、この狂気の世界のあり様なのだ。

## 7章 シン・レッド・ライン (The Thin Red Line)

### 1

我々は次の事実に向き合わなければならない。戦争の習慣というものは、それ自体のために感情へと訴える習慣を作りあげてきたということを。そしてその感傷の影で、その習慣は非難するものを撃退するだけではなく、その非難をほとんど侮辱行為と見せかけるための旗を掲げるのだ。

耳を傾けてみてほしい：

「武装せよ、武装せよ、これは開戦の号砲だ！」

「戦いは深まる：ああなたと勇敢なることか

栄光と引き換えに自ら墓穴になだれ込むものは！」

「莊厳にも重厚な戦闘陣形よ」

「『チェスター、突撃だ、突撃しろ！ スタンリー、前進だ、前進せよ！』

それがマーミアンの最後の言葉だった」

「トランペット、蹄の鳴る音、突撃、そして戦闘への意志」

「鞘から飛び出でる千の剣」

「強敵に立ち向かう以外に、

人はいかにしてより正しく死ぬことができるのだろうか？」

「『遠き地で』と伝説は書き記す、

山中の墓は遠くにある、

『その時を待たずに死したもの

戦士として、祖国のために』<sup>(1)</sup>

これらの心をかき乱す言葉から湧き出る感情の霧を通して、戦争は長きにわたり快く継承されてきた美しき絵画としてみなされている。つまり剣を手に馬にまたがる英雄たち——包帯を頭に巻いた英雄たち——橋を守る英雄たちの絵なのだ。実際には、現代の戦争において鞘から剣が抜かれることはない。実際には、最高司令官の最後の言葉が「トンプソン、突撃だ、突撃しろ！ ジェンキンス、前進だ、前進せよ！」であることはないのだ。しかし我々は無意識に、戦争というものは直接体をおつけあう無数の勇敢な戦いであると思っている。そしてその戦いにおいて神が、仮

に退屈気に権利を守ってはいけなかったとしても、少なくともその死に値する慰めを敗者にも与えたもうと信じているのだ。我々は無意識に、それぞれの異なる英雄たちが、英国のためにまばゆく勇敢な剣を鞘から引き抜いている姿を想像する。そしてときとして行われる臨時の大演習が彼らを愛国的にも「心同じく」引き寄せるとき、客間に飾られた金メッキの「Steady, the Buffs」の文字や、コックの寝室に飾られた「The Thin Red Line」の絵画は、そのロマンチックなイメージを素晴らしくいきいきとしたものに保つのだ。<sup>(2)</sup>

このような感傷的な戦争観は、ポーア戦争は生き抜いたが、1914年には死滅したじゃないかという人もいるだろう。我々はみな、戦争というものがもはや剣がぶつかり合い、騎兵隊が突撃するものではないことを知っているのだ。

もちろん、我々は知っているのだ。しかしそうやって知っていることを、我々は感情にうまく結びつけることができない。

例えば、我々は先の戦争での死傷者たちの中で、すべてが戦場で死んだわけではないことを知っている。10万の人々が、痛ましい傷に苦しみながら——しかしベッドで死んだのだ。10万の人々が、毒ガスの影響や病気に苦しんで…しかしベッドで死んだのだ。しかし先述した感傷を好むものというものは、そのことを知りながらも、依然として戦争での死を清潔で速やかで、そして慈悲深いものとして視覚化しようとしている。犠牲者がその母親に最後のメッセージを残すこともできないほど速やかに、戦争への弁護の中で、死はすべての人に訪れるのだから、ベッドでぐずぐずと死ぬくらいなら、戦場で死んだ方がいいと語るのだ。

我々は先の戦争でイギリスが海上封鎖をしたことで、中央ヨーロッパの100万の女性と子どもが餓死したことを知っている。しかしその感傷を好むものは、インケルマンやロルクズドリフトで行われた戦争の勇敢なるものたちの名を耳に響かせながら、依然としてこういうのだ。少なくとも兵士たちの戦争は、関税による経済戦争よりはもっと人道的で紳士的なものなのだ、と。

我々の多くは個人的な経験から、先の戦争というものがいかなるものであったかを知っている。しかし小柄の気の小さな夫がジェノバでの出来事を告げる見出しに心を動かされて、口ひげについた卵を落としながら、人間の中の「虎の部分と猿の部分」や、この闘争精神を表明せずにはいられないという獐猛な欲求について話をするかもしれない。仮に彼が記憶を理解さえできたとしたら、先の戦争は国から出てきたばかりの最も欲のない虎や最もだまされやすい猿さえも満足させることができず、ゆいいつ、アイス

ハンティングを行う潤沢な機会だけが、最も小さな猿たちをも満足させたとわかるだろう。

感傷を好むものは、戦争を「橋の上のホラティウス」ないしは「ウィルソン少佐の最後の抵抗」という観点で考えようとしな。彼は自身の属した連隊における結束の観点でそれを考えるのだ。戦争は地獄かもしれないが、その結果長くも栄光に満ち溢れた戦友会が生まれるのだ。戦争がもたらした友情よ！ 思い出よ！ 戦友たちとの結束よ！ 100万人の女性が苦しみ、100万人の子どもたちがレイプされ、飢え、粉々に吹き飛ばされるかもしれないが…だがあのウィルブラハム元大尉とベニークイック元伍長が10年後ストランドであいさつを交わすとしたら、そんなことはどうでもいいではないか。「ベニークイック伍長、神のご加護を！」「おやまあ、大尉じゃないですか！」

## 2

そしてそれから、休戦記念日には、国のために死んだ英雄たちの死に対して祈りがささげられる。いつものようにスピーチが行われ、いつものように説教が説かれ、いつものように見出し記事が書かれ、そしてそれらの死に対して歌われるどの悲歌からも、それがいかに平和的な意図であったとしても、このような示唆が漏れ出でてくるのだ。国のために戦うことが最も崇高な自己表現であり、国のために死すことが最も崇高な主義のための死のあり方であると。我らの英雄たちの死は、不滅の死であると。国のために死すことは甘美にして望ましいもの。

しかしながら、冷静になって彼らが戦争に向かった動機を見つめれば、英雄なんかではないことに気づくだろう。徴兵されたものや、職にありつけずやむなく軍に入隊したもの、群衆が掲げる旗やマーチングバンドの喧噪に乗せられて調子に乗ってしまったもの、あるいは、多くのものにとってそうであったように、戦時下の生活などのみち地獄であって、そのことを考えないで済む唯一の方法が軍服を着ることであったものたち。彼らが英雄のはずがないのだ。あるいはこんなこともないだろう。無能な司令官によってまとめて切れていないワイヤーに放り出され、名誉と呼べる状態まで熟すまで、黒毒のようにつるされたからといって、仮に運命のめぐりあわせが偶然にも彼らを名もなき戦士として選びだしたとしても、これらの凡庸な非英雄的なものたちが英雄に変わることはないだろう。生きていようが死んでいようが、彼らは高潔さや卑劣さといった平時の特性を保持しているのだ。それは自分たちが参加することになる戦争を経験していない今日の若者たちが、高潔だったり卑劣だったりするのと同じなのだ。

戦争は英雄性を表すものであるという感傷的な感情によって戦争に参加したものすべてに勲章が与えているわけ

であるが、それは戦争の実態とは大きく異なるものだ。現代の戦争という概念は、ほとんどコミカルといってもいいほどに非英雄的なものなのだ。ヘンリ5世は「英国のものが彼から得たほどにも名誉を失うことはなかった」、そんなアジャンクールの日々は過ぎ去った。<sup>(3)</sup> 英国の小さな軍艦たちが誇らしげに隊列を組み、ほとんど見下すかのように無敵艦隊アルマダに立ち向かった、そんな日々は過ぎ去ったのだ。英国人である以上、その勝算が3対1未満であることはない、そんな日々は過ぎ去ったのだ。現在は間近に迫った戦争はないが、その脅威はあるという中で、他国に出抜かれてはならないからという理由で、我々は船や銃と銃や戦闘機の数で競い合っている。そうであったとしても、戦争がいざ始まったときには、勝利の明暗を握るのは「英国紳士たち」、すなわち科学者や軍需工場の労働者たちなのだ。

このように現代戦争とはそれ自体においてまったく英雄的ではないのだが、戦争に巻き込まれたものたちは、自身とは関係のない外的要因によって戦争に巻き込まれ、そのようにして、件の悲歌の作詞者がいうところの最高の自己犠牲を払ったのだと強く主張されるかもしれない。つまり、彼らは他者のために犠牲を払ったのだ、と。しかしここではしばらくそのような感傷を交えずに議論を続けた。英雄であるところの自己犠牲とは、主体的な犠牲であり、熟慮の上での犠牲なのだ。しかし先の大戦で軍に志願した兵士はせいぜい5パーセントに満たないのだ。そして志願したその彼らは戦争で多くの犠牲者が出ることを知りつつ行動を起こしたわけであるが、その犠牲となる死者は自分ではなく自分の戦友であると思ひ、願ひ、祈りながら(それほどまでに通常の人間というものには非英雄的なのだ)志願したのだ。彼らは進んで死のリスクを負ったのだが、そのリスクというものは若い愚か者たちがバイクで、あるいは大人たちが飛行機や極地探検で、または大試合の後や山脈の中で犯すリスクと同じなのだ。しかしながら、確かにある特定の死はこれとは大きく意味が異なる。生きることを望みながら、自身の意志によって死を選んだものは確かに英雄だと言えるだろう。毎年我々が終戦記念日に追悼している中に、いったいそのような英雄が何人いるのだろうか。いったい何人の「不滅の死」が彼らの祖国のために熟慮の末に死したのだろうか。

戦争は起源においてもまたその運営においても、英雄的な行為ではない。素晴らしく英雄的な行為が戦争ではなされるが、それはその運営に責任があるものによってではなく、また独占的かつ不可避的に、死者たちによってなされるものでもない。先の戦争で亡くなった1千万のものたちの中で、900万のものたちは望もうが望ままいが戦わざるをえなかったものたちだ。そしてその900万のうち、800万

のものたちは英雄的なことを成し遂げる前に殺されてしまった。彼らはトラックに引かれていくリンネル商人と同様に「不滅」ではないのだ。また彼らの死は、株式仲介人が風呂場で果たした死と同様に「甘美」でも「望ましいもの」でもないのだ。

しかしもちろん、誰も100万の母親たちに、「我々にはあなたの息子さんが必要です」と言っておきながら、6か月後に「すみません、みんな死んじやいました」ということなどできないのだ。彼らが戦争を耐えられうるものにするには、空想物語の伝統を用いる必要があるのだ。「奥さん、私はあなたの息子さんを奪いました。代わりにあなたにある英雄の思い出をお届けします。毎年、私たちは彼の不滅の死を共に記念することになるでしょう。国のために死すことは甘美にして望ましいものなのです。」

### 3

我々の予備大隊に学校を出たばかりの物静かな少年がいた。2人兄弟の末っ子だった。我々は同じ連隊の部隊に参加するために、一緒にフランスへ向かっていた。そしてその道中に私は彼のことを以前よりも深く知る機会を得ることができた。すでに彼の兄は数か月前に戦士しており、彼は残ったゆいいつの子として両親からひどく愛されていた。事実(笑うなり泣くなり好きにすればいいが)彼の両親は彼に鎖かたびらを買って与えていたのだ。それは中世の時代に短剣による攻撃を防ぐために使われていたような代物であり、今日では、銃剣での一突きや銃弾の破片を防ぐという謳い文句で、息子を溺愛する母親向けに売られているものだった。彼はこの饒別はかなり困惑していた。そして約束通り、彼はそれをフランスへ持って行ってはいたのだが、それを着るべきなのかどうかについては決めかねていた。私が思うに、学校を出たばかりの若者にとって、それは「公正でない」何か不恰好で、臆病な行為だと感じていたのだろう。彼は母親との約束と、普通ではないことへの嫌悪感の間で揺れていたのだ。かわいらしく、無邪気に、そして悲しみに満ちた様子で、彼は私に助言を求めた。私は、彼の母親に確かに着たと伝えるためにも、彼にそれを着るように言った。そしてそれを着たことでいかに身の安全を感じることがきているか、彼が母の元へ帰るのがいかに確かなものかと伝えるように助言した。彼が私の助言を実行したのかは知らない。新たな部隊に到着したときには、もっとましな助言をしてあげることができただろうが、もはやそんなことはどうでもいいのだ。というのも我々が戦場の範囲内に最初に差し掛かった日の午後、彼が茶の用意をしているときに、爆弾がさく裂し、彼は粉々になってしまったのだから…

国のために死すことは甘美にして望ましいもの。

いったい彼の死が、どうしたら甘美な死、望ましい死となりうるのか、私にはいまだにわからない。あるいは彼の父親と母親にとっても同様だろう。たとえ大佐が彼らの息子が生前同様いかに勇敢に死して、またいかに英国紳士であったかを伝えたとしても。

## 4

もし心の奥底で、戦争が詩人によって詠われるべき価値のある勇敢な行為だと感じているのならば、情熱をもって平和へと向けて働きかけるのは難しい。その詩とは、読者の涙を誘うために、戦場での英雄的死のみを描きだすものなのだ。ラスキン、彼の詩は戦争の弁解者によって誇らしげに引用されるものだ。「あらゆる人類の偉大なる性質は、戦場においてのみ現れるのだ」と。もっとも彼の戦場体験の一部は、リビングルームに飾られた『騎兵隊の突撃』から得られたに違いないのだが。しかしあるものはあの心揺さぶるバラッドを耳にしたときに、そう考えることへの口実を付けられるかもしれない。

突撃せよ、軽騎兵よ！

ひるむものはいるか？

否、戦士は知っているのだ

誰かがへまをしでかしたことを

しかし彼らは答えようとはしない

彼らは理由を問いはしない

彼らはただ行い、そして死すのだ

死の谷へ進む

600の騎兵たちが。<sup>(4)</sup>

このように言えば、へまをしでかしたまぬけな者（戦闘においては必ずといっていいほど現れるのだが）でさえ「人類の偉大なる性質」の中にその居場所を与えられるように見える。というのもそいつ自身が英雄的でなかったとしても、少なくとも他のものが英雄的であるきっかけを作っているためなのだ。「彼らは理由を問いはしまい」とは、ホモサピエンスはいかに素晴らしくその性質を明らかにするものなのだろうか。

だがしかし…

もし仮にこの4年間で、1万のタイタニック号が連続して冰山にぶち当たり、海底に沈んだとして、それぞれに1000名の溺死者が出たのだが、適度に良識のある人は、より多くのタイタニック号を造船し、より多くの冰山に激突させることについての言い訳の中で、あらゆる人類の偉大なる性質は、難破においてのみ現れるのだと満足気に述べるだろうか。

あるいは、あらゆる人類の偉大なる性質は、疑いもなくペスト禍においてのみ現れるのだという事実は、ひどい公衆衛生への弁明の中で進展してきただろうか。

あるいは、地震の良い面に目を向け、あらゆる人類の偉大なる性質は、地震においてのみ現れるのだということとはできないのだろうか。

しかし、人類の最も高貴で、最も誉れ高く、最も偉大なる性質は、ほとんど目をくらませるような輝きを伴い、宗教的迫害において一層輝きを増すのだ。

拷問台を受け入れよ！拷問具による責めを受け入れよ！薪に灯りを、そして歓喜に満ちて、火刑が行われた殉教の地スミスフィールドの炎を再び灯すのだ。殉教とはなんと喜ばしいことか。

数百年前、英国国教会の聖職者は驚くべき勇気を持ってこのように述べていた——

「人類につきまといえる最大の呪いとは、戦争である。平和下に犯されるいかなるたちの悪い犯罪も、平和な日々には密かな墮落や国家の考えなしの無節制によって過ぎされるいかなる時間も、戦時下に密かに忍び寄るこの巨悪に比べたら取るに足らぬものだ。神は戦時下に忘れられる。あらゆるキリスト教的博愛も、踏みにじられるのだ。」

しかしこれが書かれたのは数百年も前のことであり、その上その著者シドニー・スミスは、持ち前のユーモアでその名を馳せた人物だったのだ。

## 8章 前進せよ、キリスト教徒の兵士よ (Onward, Christian Soldiers)

## 1

戦争については、ラスキンとシドニー・スミスのどちらが正しいのだろうか。シドニー・スミスの「神は戦時下に忘れられる。あらゆるキリスト教的博愛も、踏みにじられるのだ」という言葉が正しいのならば、キリスト教がいまだに信仰を取り戻していないのも、戦争を拒絶する勇気を持っていないのも奇妙なことだ。父親が日曜の午後のひと眠りを楽しむために家の中を静かに保つには、正しいか間違いかだけが子どもたちに示すべき唯一の区別の仕方ではない。それは便利と不便という区別にも同じことがいえるだろう。モーセの十戒に信仰の土台を置いていようが、山上の説教に置いていようが、キリスト教徒とはその人生を捧げるべき究極の基準に対して誓いを立てているものなのだ。そしてその人生を捧げるものに「戦闘」へと出向くことが含まれるのであれば、彼は戦闘を自信の生きる基準としなければならないのだ。

この章では、戦争の伝統をキリスト教性の尺度に当てはめてみようと思う。

もし折に触れて、私が教会、それもとりわけ英国国教会を熱心に勧めたり、厳しく非難したり、とがめたりするように見えるのであれば、あるいは全体を通して私が読者と私自身が正統な信仰を受け入れることが当然だと思ってい

るように見えるならば、それは第一に教会というものが善悪の公式な象徴であるからであり、第二に善悪における信仰こそが現在私が目的としている重要となる唯一の正統性だからなのだ。私がキリスト教徒というとき、それはキリストの教えの中に自身の理想とする善性を見出したものを意味する。

教会は伝染病を受け入れるときと同じ論理で戦争を受け入れる。誰も自分の村でチフスが感染拡大することを望んでもいないし、進んでそうしようとするものもない。しかし教区牧師が次の説教の中でも指摘するだろうが、これらの苦難は神によってもたらされるものなのだ。もちろん特定の場合においては、その試練は地主の怠慢や、住人の気まぐれにその原因があるのだ。そうである限りにおいては、すべての善良なものたちは、その地主や住人を非難するのだ。しかしときとして、我々にその責任があったとしても、我々がそれを避けることができたとしても、いつでもそれに立ち向かうことができたとしても、教会にとってこの感染症は神が我々にもたらしたこの世界の不可欠な一部なのだ。つまりいかに嘆かわしいものだとしても、チフスの感染拡大は必ずしも懺悔や良心の呵責の対象となる問題とはならないのだ。

教会はまったくもってこれと同じ論理で、戦争を捉えている。ある人の祖国が行っている戦争は、その敵対国の邪悪さにその原因があるのだろう。2国が行っている戦争は、両国の邪悪さに原因があるのだろう。戦争では邪悪な行為が行われるのだ。ほかならぬ全ての国家の個人によって(ああ!),そして全ての国家の政府によって。そのため我々は、それを避けるための最大限の努力をしなければならない。しかしいかに嘆かわしいことだとしても、戦争の勃発は必ずしも懺悔や良心の呵責の対象となる問題とはならないのだ。それは戦争というものが、神が我々にもたらしたこの世界の不可欠な一部だからなのだ。

つまるところ、キリスト教が戦争をとがめるときにはいつでも、1つのある戦争をとがめているに過ぎない。戦争そのものをとがめているわけではないのだ。

私は第1章で1つの戦争を描いた。キリスト教は惜しみなくその戦争を非難した。英国のキリスト教は、ドイツのキリスト教が英国とロシアを非難したのと同じくらい大胆に、ドイツの邪悪さについて非難した。実際のところは、あの戦争はオーストリアによって始められたように思われる。しかしウィーンの人々は陽気で、彼らの音楽は軽妙で響きゆたかだ。そのため彼らは今自分たちが何をしようとしているのかを知らなかったのだと想像してあげるのが慈悲深い行いだった。しかしそうであったとしても、セルビアのキリスト教はみごとにその問題に言及したのだ。そのためいったんここは、教会が評定を下してしまったこの特

定の戦争のことは置いておいて、戦争の典型について考えてみようではないか。つまり、戦争の伝統について。

2つの国家がある何かについて争っている。片方がそれを所有し、もう片方はその所有権を主張している。あるいは両国ともにその所有権がなく、どちらもその所有権を主張している。彼らが求めているものは、それを所有することでの物質的利益であるように思われるし、実際にそうなのだろう。両者は脅威にさらされていると主張する。しかしどちらも譲らない。このようにして、両国の「戦争状態」が宣言されるのだ。この瞬間から、争いが始まる。その争いの中では、片方の国の国民がある認められた方法によって、他方の国民より可能な限り多く殺し、破壊することが目的となる。この目的においては、妨げになると思われる神のいかなる教えをも無視することになる。記録に残らないレイプや爆破や女性、子どもの餓死といったものは、争いそのものと、戦闘や爆発物や政策が意図したよりもはるかに行き過ぎてしまったという感覚に付随するものなのだ。この争いは、その政府が不屈の精神で、もう片方より多くの男性、女性、子どもたちの死を受け入れた国が勝つことになる。そして必然的に相手国の国民の死が耐えられないほどに鮮烈であるということは、信仰深い人々の間での絶え間ない祈りの対象となるのだ。そして数か月か数年の時間が過ぎて、片方の政府の不屈の精神が道を譲り、勝利した国家が相手国から可能な限り多くの財産や領地を奪取することでその戦争の原因を解決することになるのだ。

これが戦争なのだ。そのあり方を非難する教会などありはしない。主教は熱心にそれを認める。公認牧師は、兵士たちの生活の宗教面がないがしろにされていないかを監視するために軍に帯同する。

いったいどういうことなのだろうか。誰が笑い、誰が泣いているのだろうか。

## 2

前の方の章の中で、私は読者には私と同じように戦争について考えてほしいと述べた。私が本当に願っているのは、読者がもう一度、始まりから、戦争について考えてもらうことなのだ。我々の信仰というものは、調査もなしに先祖から受け継がれてきた伝統的な信仰だ。犯してもいない罪について告白するまでの囚人たちの苦しみは、かつてキリスト教徒たちによって、神によって認められた当然の、神聖なる行いとして受け入れられていた。しかし今では、彼らはまるで誤解していたとでも思われているようだ。そして彼らがこの数年来、戦争についてずっと誤解し続けてきたのであれば、それはショックに値する問題ではないのだ。我々の祖先たちの知恵は、何度も繰り返し、彼らの人間性や獣性が、彼らの名誉と正義の考えが愚かしい



ものであることを証明してきた。「この数世紀にわたり人類の統一的理解がそれを受け入れてきたのであれば、戦争は正当化されなければならない」と多くのものたちが恐らく無意識に考えるのと同様にそう考えることは、「この数世紀」が過ぎたあとに、人類がなんとか拒否してきた唯一の忌まわしいことを忘れることに等しい。戦争などというものは、奴隷制や異教徒の弾圧と比べたら、長続きはしないものなのだ。

私はここに、つい最近拷問と磔刑への信仰を放棄したばかりの教会を招き、戦争への信仰もまた失われるよう努めたい。

教会は殺人を神への罪であるとみなす。ほとんどの場合において、殺人とはある個人によって他の個人を取り除くことのみ終息させることができる、ある状況を終わらせるための行為であるといえる。殺人の唯一の動機は、その他者の死が殺人者の富や幸福、安全を保つか増幅するという点にあるのだ。

戦争とはある集団によって、他の集団による反対を取り除いてのみ終息させることができる、ある状況を終わらせるための行為であるといえる。そしてその反対とは、対峙する勢力の非常に多くの人々を殺すことによって取り除くことができるのだ。人々を殺す唯一の動機は、その人々の死が殺す側の集団の富や幸福、安全を保つまたは増幅するという点にあるのだ。

つまり戦争の動機とは、殺人犯の動機と同じものであるように思われる。結果も同様である。ただし、規模は100万倍ではあるのだが、邪魔な人を殺すことが間違っただけというのであれば、邪魔な100万の人々を殺すこともまた間違っただけのはずだ。しかし教会は、それを間違っただけと述べるのだ。その理由を説明してもらおうにしよう。

M: さて?

C (ここでいうCとはカンタベリー (Canterbury) 大司教、あるいは慎み深い彼の司教代理 (Curate)、聖堂参事会会員 (Canon) かもしれないし、聖職者 (Clergyman) かキリスト教徒 (Christian) なのかもしれない): まず初めに、君は攻撃と防衛という戦争の決定的な区別を無視しているようだね。

M: 教会はその区別をするのですか?

C: もちろんだ。殺人を犯そうとするものと、それを防ごうとするもの間には当然明確な区別があるじゃないか。もしある男が私にナイフで暴行を加えたとしたら、私は抵抗する権利があるだろう。そして自身の命を守る唯一の方法が彼の命を奪うことであるなら、教会も法律も私を許すことになるだろう。

M: しかし教会も法も殺人見込みのものを許しませんよ

ね?

C: もちろんだ。

M: つまりこういうことでしょうか。もしある国が気まぐれに別の国を攻撃したとして、教会は防衛する側の国が防衛において奪った命については許すと?

C: もちろんだ。

M: そして攻撃した側の国を非難する?

C: まさしくそうだね。

M: 英国国教会はこの理由で英国を非難したことがありますか?

C: 私は誇りをもって、そのような機会はこれまでなかったと思うがね。

M: ポーア戦争でさえ、防衛のための戦争だった? 侵略行為や殺人、攻撃、敗北…それからいろいろ…といったものに抵抗するための試みだったと?

C: こういうのが公平だろうね。キリスト教徒の良心は、あー…ポーア戦争の根底に流れるものについては少しだけ心が揺さぶられた、とね。

M: しかし教会は英国を非難しませんでしたね。

C: ああ、しなかったとも。

M: 国の教会で、その教会が属する国を非難した教会はありますか?

C: それは私にはなんとも言えないな。

M: つまり「不可欠な区別」とは攻撃や防衛といった点にあるのではなく、教会の属する国であるかどうか、なのではないでしょうか。

C: キリスト教徒が愛国主義者で何が悪いのだね。

M: 問題なのは、その人の心に愛国主義とキリスト教の信仰、どちらが先に思い浮かぶのかということです。

C: 神への義務の前に、人の心には何も出てきはしないさ。ただ、献身的な子が何の意図もなしに、その母親に対しては寛大であるのと同様に、キリスト教徒が何の意図もなく、彼の祖国に寛大になってしまうことはあるかもしれないね。

M: ローマの教会は国教会ではありませんか?

C: 違うね。

M: ローマ教皇は自身の国について何の偏った考えももっていないと?

C: 想像もできないな。

M: 先の戦争ではいかなる国も完全に防衛のためだけに戦争を行ったわけではないのだから、どの国も少なくともキリストによる責めを受けるに値するはずですよ。司教代理はその国を非難しましたか? 彼はその国を攻撃したすべてのカトリック国を破門するよう圧力を与えましたか? 彼はその者たちを殺人者として非難しましたか?

C: 国家をまたぐ教会のトップとして、大司教は難しい状

況に置かれているのだよ。各国家を裁くことを避けるのが、彼の努力の形なのだと私は思うね。

M: それでは、国家をまたぐ教会のトップが各国家を裁くことを避け、自身の国を非難することを避けるのであれば、攻撃した国家、防衛に徹した国家という不可欠な区別は、私だけでなく、教会によっても無視されることになるわけですね。

C: それは同意できないな。

M: 大変結構です。それでは、英国だけが、あまねく国家の中で唯一防衛戦争に徹した国だったとしましょう。

C: それは紛れもない事実だからね。

M: そしてそれらの国々と戦う際、英国は非常に多くの人命を奪ってきました。

C: 避けがたきことだよ。

M: 一般的に言って、教会とは人の命を神聖なものとしませよ。

C: ああ。

M: 命が神聖であるがゆえに、人は耐えがたき苦痛や不幸によって自らの命を絶つことが許されていない？

C: 教会は自殺を咎めるものだといえるだろう。

M: というのも、私たちはみな神の手の中にあって、生きるか死ぬかを決めるのは私たちではなく神だからです。

C: その通り。

M: ではその場合、戦争は神の手の中から抜け出してその決定がされたのでしょうか。その場合は罪ですよ。あるいは戦争は神によって定められたということなのでしょうか。その場合は我々には戦争の責任はないはずですよ。どちらなのですか？

C: もちろん私たちに責任はある。しかし過去に教会が何と言ってきたにしても、人知のすべてをご存知の神ご自身は、戦争を始めたものとそれに抗ったものを思慮深く区別しておられると私は確信している。

M: 「戦争に抗う」とは戦いの試練を受け入れるという意味ではないのですか？ たとえそれに100万の神聖なる命の喪失がともなったとしても、それは罪ではないと？

C: 人の死を引き起こしたという事実だけが、必ずしも罪というわけではないのだよ。もしそうならば、殺人犯を磔刑に処すこともまた罪ではないか。

M: おおざっぱに言えば、あなたは殺人犯とその処刑を、国の侵略と侵略国家への反撃と比較しようというのですか？

C: おおざっぱに言えばそうだね。

M: しかしそれが多くの命を守っているというのは、死刑制度を道徳的に正当化する言説ですよ？ もし処刑がなかったら、より多くの殺人者がいたに違いないという。それは教会が認めるゆいいつ可能な議論ですよ？

C: それが事実だと私は思うね。

M: では一方で、戦いの試練を受け入れることは、数千もの死者を招きます。その死者とは、戦いがなければ発生しなかったはずのものです。では、それを道徳的に正当化するものは何なのでしょう？

C: 君は英国が宣戦布告を完全に無視し、軍事的侵略に対して無防備でいるべきだと本当に考えるのかね？

M: 私は海軍協会ではなく、キリスト教教会としてのあなたの見解をお伺いしています。

C: いかなるキリスト教徒にとっても、そのような間違った行為をただ消極的に受け入れるのは耐えがたいことだ。

M: その場合、誰が、何を、耐えることができないと？

C: 君はドイツ軍がロンドンの町を行進するのを眺める準備ができていると本気で思っているのかね。ドイツが望むいかなる辱めも、賠償金の要求も、不当な併合も受け入れる準備ができていのかね。

M: どうか落ち着いてください！ そのようなことに対して、私だって受け入れる準備ができているわけじゃないですよ。むしろ私はそれらの行為を憎んでさえいます。そのような行いによって辱めを受けたと激しく感じることでしょ。しかし同様に、著者は書いた舞台脚本がボツにされたり、小説が失敗作の烙印を押されたりしたときに、辱めを受けたと激しく感じることでしょ。あるいは労働者は意地の悪い雇用主から叱られることを嫌いますし、聖職者だって自分の教会に信者が集まらないだとか、司教から非難を受けたときには辱めを受けたと激しく感じることでしょ。しかしその辱めを癒したり回避したりするために、私たちは人を殺しには行きません。なぜこの尋常ではない考えこそがキリスト教のものなのでしょうか。つまり、人は過ちを犯すくらいならすべての苦しみを受け入れなければならない、国家はすべての苦しみを受け入れるくらいなら、過ちを犯すべきだと？

C: 君は大げさにいつているだけじゃないか。

M: では天と教会よ、私を大げさにさせないでくれたまえ。真実に向き合いましょう。もし1940年に復讐心に燃えるドイツが再軍備をして、英国に宣戦布告するとしたら、あなた方は英国が防衛のために武装することを認めますか？<sup>(5)</sup>

C: 英国はしぶしぶ軍備を整えるのだらうがね。

M: そうであれば、あなた方は認めるのですか？

C: そうだね。

M: そして英国がドイツの男たちだけではなく、女性や子どもも可能な限りたくさん殺すことを認めますか？

C: いいや、絶対に女性と子どもを殺すことは許されな

い。

M：正直になっていただきたいのです。あなたも戦闘機が戦争で使用されていることをご存知でしょう。戦争の試練を受け入れた国家が、戦争でいかなる武器をも使用することをご存知でしょう。そしてもちろんあなたはご存知のはずだ。戦闘機が使われたら、女性と子どもも殺される。それでは、あなた方は、あなたの祖国がドイツの男性、女性、子どもたちを、敵国の心を砕き、戦争が終わるのに必要な数だけ殺すことを認めますか？

C：必要最低限はそうだろうがね、しかし、必要以上ではないことを願うよ。

M：そしてあなたはその類の殺害行為を殺人と呼びませんか？

C：それは違う。

M：では戦争が広がり、新たな同盟が結ばれ、そして最終的に勝利への我々の唯一の希望はロシアからの軍事的支援だったとしましょう。その場合のロシアの示した条件が、英国の人々が神を放棄することであったとしたら…もっとも英国は実際にこれまでそうしてきたのですけどね。その場合、教会は人民の代表たる政府によるその神聖なる放棄を認めるのでしょうか？

C：君は用意周到に教会を非難しようとしているのかね？

M：私は教会というものが非難されるのかどうかを見定めようとしているのです。

C：答えはノーだ。

M：では、我々を救い上げるのがトルコだったとして、我々がイスラム教徒になり同じ宗教的熱狂を共有することでトルコ人たちはよりよく戦うことができると彼らが考えているとしたらどうでしょうか。教会はその改宗を認めるのでしょうか？

C：答えはノーだ。

M：戦争が終われば再びキリスト教徒に戻ることもできるとしても？

C：それは我々の魂において、嘘を罪に加えることになるじゃないか。

M：しかしあなた方は嘘を非難することはないのですか。いかなる戦争においても、あなた方は嘘を非難してこなかった。あるいは前線からの速報が真実だとでもお考えなのですか？

C：残念ながら戦時下においては…

M：つまりこういうことですね。教会は仮にそれが敗北をしないための唯一の手だったとしても、英国がキリスト教を放棄することもイスラム教を受け入れることも認めることはない。

C：そういつていいだろうね。

M：つまりあなた方の信者たちの改宗を認めるくらいなら

ば、ドイツが望むいかなる辱めも、賠償金の要求も、不当な併合も受け入れる準備ができています…。

C：その通りだね。

M：私が言わんとしていることが分かりませんか？ キリスト教性が終わり、愛国主義が始まる点がここにあるのです。ではいましばらくこのことについて考えてみましょう。1920年に先見の明のある政治家が1940年に起きる戦争を予見していたとします。そしてその戦争が消耗戦になると確信し、英国の唯一の希望は人口を最大限に増やすことであると気付いたとします。そして政府が、すべての成人男性はただちに結婚をし、子どもをもうけなければならないという法律を施行したとします。そして200万の男性が取り残されて独身だったので、不倫の形で彼らの相手をする女性ボランティアを募ったとします。教会はそれを許しますか？

C：返事が必要かな？

M：ええ、ただちに。教会はすでに国を代表して、殺人を犯すことを認めています。では姦通はどうなのだろうと思ひまして。

C：前に、私はそれを殺人とは呼ばないといったはずだ。

M：それではこの不倫行為も姦通と呼ぶ必要はありませんよね。例えばそれを「一時的配偶者としての登記」とでも呼べばいいのです。祖国のために…どうです？

C：私からの答えが何なのかをすっかりわかっている様子だな。

M：名誉にかけて、そんなことはありません。

(そしてそんな答えを知りはしないので、ここでは何も示すつもりもない。)

しかし私はこの議論が我々をどこへと導こうとしているのか、それが明らかになり始めていると信じたい。祖国のためである限りにおいて人殺しを認める教会に、祖国のための姦通がどの程度その地位を脅かすことになるのか、それを見定めるのは困難だ。また同様に、英国国教会が、それがいかに愛国的に思われたとしても、姦通を祝福すると想像するのも困難だ。もしこの2つの困難が解決するのであれば、このような結論を下すことができるだろう。すなわち、人殺しは愛国心を示すための伝統的な手法であるため認められるが、姦通は愛国心の伝統的背景にはないので、非難しかされることはないだろうと。理論上、人が神よりも先に祖国を置くのであれば、彼は人殺しを受け入れたことに加え、姦淫と改宗も受け入れる必要があるのだ。そして同様に、人が神を第一に考えるのなら、彼はその3つすべてを拒否する義務があるのだ。

## 3

次の言葉は古い時代の有名な聖職者に由来する。

「もし私がせめて王に仕えた際の半分の熱意をもって神に仕えていたとしたら、神はこの齢の丸裸の私を、的の眼前に見捨てられるようなことはしなかったことでしょう」<sup>(6)</sup>

彼がこのように考えているのは奇妙なことだ。今日の教会は王と国へ仕えることが、それがいかに醜いものであったとしても、奇妙ながらも周到なやり方で、神に使えることと同義であるという信念を持っているように思われる。恐ろしい信条は神の権威を必要とし、神の権威はキリストの言葉を記録した福音書に記された、2つの言葉に見出すことができる。もちろんキリストがその言葉を口にしたときにその念頭に大戦のことがあったわけではないのだが、このほどとあるクリスチャンの紳士が保証した通り、この言葉は「キリストが平和主義者をいかに捉えていたか」を示している。

1. 「武装をした強者がその地を収めるとき、神々は安寧の中に過ぐす。」<sup>(7)</sup>

キリスト教徒の戦争擁護者は都合よくもここで立ち止まり、無宗派の平和主義者が彼の聖書を読まないよう願うことだろう。というのも次の行ではこのように述べられているのである。「しかしより強きものと出くわし、そのものに敗れたときには、これまで信じてきた武装具をはぎ取られ、略奪品は分けられることになるのだ。」この箇所は、キリストが軍国主義者をいかに捉えていたのかを示しているように思われる。というのもこの言葉は悪魔の追放に際して発されたものだからだ。そして恐らく思い出されることだろうが、人々はこのように言うのだ——「奴は悪の王であるバルゼブルの力を使って悪魔を追い出したに違いない」と。するとキリストはこのように述べる。すなわち「サタンがサタンを追い出すことはできない。悪魔とはより強いものによってのみ追い出すことができるのだ」と。そして続く寓話では、「武装をした強者」がバルゼブルであり、「これまで信じてきた武装具」を奪い取った「より強きもの」が神であることが明かされる。武装具がキリストにとっていかなる強力な魔力をも生まなかったと仮定することは、我々が知るところのキリストの性質から考えても、不自然ではない。そして、彼が行ったばかりの治癒の奇跡が、びらん性毒ガス使用への予備行為を意味するわけではないと仮定することは、この状況においては適切だといえる。

しかしキリストは次のようにも言っている。

2. 「皇帝のものは皇帝に返し、神のものは神に返しなさい。」<sup>(8)</sup>

このよく引用される言葉は、一般的には人の魂を分かっ

ことを正当化するときに用いられる。人が神とマモン（強欲の神）に仕えるのは許されないが、皇帝と神に仕えることは許されるのだ。仮に皇帝と神がそれぞれ別々の方向へと導いているとしてもだ。

さてここで興味深いのは、これらのキリストの言葉は支配するローマ人に対して発されているのではなく、支配されているユダヤ人に対して発されている点だ。彼らの支配者たちは、ユダヤの聖地エルサレムから彼らを支配している。それはまるで（あくまで愛国主義者たちの理解によると、だが）我々がさらなる戦闘機を作らなければ、ドイツがロンドンから我々を支配するだろうことと同じなのだ。では仮に、英国がドイツに降服したときにキリストがロンドンに降り立って、ウィンストン・チャーチル氏がキリストに、我々が大人しくドイツに賠償金を払うべきか尋ねたとする。そしてキリストが「ドイツのものはドイツに返し、神のものは神に返しなさい」と答えたならば、チャーチル氏の愛国精神は大いに落胆したことだろう。彼が告げられたかかったであろうことは、グレンイーグルスに秘密裏に作られた毒ガス工場と、スイスと秘密裏に結ばれた同盟によって、講和条件の武力による拒否を正当化するというものなのだ。そして彼はそれとはまったく逆のことを告げられたわけだ。

というのも、仮にキリストの答えというものがジレンマからの逃避以上のものであったとして、それははっきりと「神に仕える限りにおいて、我々が征服される民族となることに何の問題があるのか」と告げるものであるだろうからだ。

こうなってくると、聖書に記されたこれらの言葉が、キリスト教徒が求めるに違いない戦争へのあの神聖なる権威を与えるとは考え難い。もしかすると、その権威は私が見落としているキリストの言葉によって与えられるのかもしれない。（例えば「もし、右の手が汝をつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。」などドイツがフランスの右手にあって、北極を目指しているという事実をうまく言及しているかもしれない。）しかし私がその言葉を見つけ出したとしても、それらの言葉にどんな解釈を付け加えることになるのかについて、私は確信を持っていないことだろう。というのもキリスト教性が戦争を認めることを正当化するためには、2つの理論がありえるように思われるからなのだ。そしてどちらの言い方が私の文脈にふさわしいのか、はかりかねているのだ。

理論A：国家への忠誠は神の第一の法であり、神が作りたもうたあらゆる法に優先されるべきものである。

理論B：国家の安全は神にとって極めて重要なものであるため、それを成し遂げるためにはいかなる手段を用いようが神がそれをお許しくださる。

これらの2つの理論の違いは、ある実践的なそれらの適応例を見れば明らかとなるだろう。

理論Aの元では：

政府は（完全に私欲によるものからか、あるいは最大の愛国的理由から）広く国民に近親相姦を命じ、そしてそれを得る。

その際：

1. 政府のメンバーは神に対して自身の罪の責任を取らなければならない。

2. 国民はその罪を犯すことを免除されうる。（近親相姦を拒む場合に限り、ただしその場合、彼らは神の第一の法を犯すこととなる。）

理論Bの元で：

政府は広く近親相姦が行われることを命じる。

その際：

1. 仮にその命令が完全なる私欲によって発されたものであれば、政府のメンバーだけでなく、国民もその罪の責任を取ることになりうる。

2. もしその命令が国家の救済にとって必要なものであるのなら、誰も神に対してその罪を問われることはない。というのも、神の是認はすでに確かなものであるからだ。

[筆者注——このままではその命令を正当化する責任が政府にあるのか個人にあるのか不明確なので、さらに2つの副論が必要だろう。副論aの元では、個人は政府の必要性に関する説明を受け、また免除を求めることもできる。一方副論bの元では、個人は自身の良心に従って、その必要性に関する説明に従わなければならない。]しかし、我々が聖書において正当化する言説を見つけ出したこれらの理論のどちらかを選ぶと決めるときにさえ、どの規模のコミュニティにこれらの言説が適応されるのかを判断するのは困難だ。もし2名の人が互いに宣戦布告をして、それぞれの家に爆弾を投げ込んだとして、それによって生み出された家族の死や負傷には神の是認が与えられないのは明らかだ。それでは、2つのグループであればその承認は適応されるのだろうか。砂漠の島で12名の人々が6名ずつのグループに分かれれば適応されるのだろうか。あるいはコミュニティと呼べる規模になればよいのか、それとも国家を代表するコミュニティであればよいのだろうか。そしてその規模がグループ、コミュニティ、国家と大きくなっていったところで、その是認を決定するのは、神の手中にあるのだろうか、それとも最新の講和会議の中にあるのだろうか。神はロイド・ジョージやクレマンソーが、どちらのグループが十戒による自由裁量権を与えられることになるかを言うてくるのを待っているのだろうか。そして彼らの名は、正式に天に置かれたホワイトリ

ストに正式に記されているとでもいうのだろうか。

ここで述べたほとんどは、くだらないとかこじつけに聞こえるかもしれない。しかし私はこれが「ふざけている」とか「まったくもって俗っぽい」などと言われてもかまわない。これはあくまでみんなにもう一度、始まりから、戦争について考えてもらうために書いたものだからだ。現代戦争というものは（キリストに由来するこの西暦におけるものの中で）まったくもって絶対に、そして精神的な逃げ道がないほどに、数千もの、いや恐らくは数十万もの女性や子どもたちを窒息させ、毒殺し、死の苦しみにへと陥れるものなのだ。キリスト教徒だろうがユダヤ教徒だろうが、無神論者だろうが不可知論者だろうが、このことを人生の哲学に刻み込んでいただきたい。「国家に他に何ができる？」などという言葉では不十分だ。「これまでもいつも同じだった」という言葉は不十分であるし、また真実ではない。ここに私が述べたことは真実であるし、あなたはそれを受け入れたことを、自分自身のために正当化しなければならない。そして正当化とは、あなたにとって常に神聖である究極の真実に基づかなければならないのだ。

#### [訳注]

- (1) 上から George Gordon Byron の *Childe Harold's Pilgrimage*, Thomas Campbell の “Hohenlinden”, Byron の “On the Eve of Waterloo”, Walter Scott の *Marmion*, Alfred Tennyson の “The Charge of The Heavy Brigade at Balaclava”, Edmund Burke の “Reflections on the Revolution in France”, Thomas Macaulay の “Horatius”, Henry Newbolt の “Clifton Chapel” より引用。Burke のパンフレットを除けば、いずれも戦争を詠った詩から引用されている。
- (2) “Buffs” は王立イースト・ケント連隊の愛称である。“Steady, the Buffs” の出典は不明であるが、戦争の際に用いられた号令の一種であると思われる。“Thin Red Line” は19世紀クリミア戦争に由来する表現で、横並びの陣形を取る赤い軍服の兵士たちのイメージが想起される。
- (3) William Shakespeare の *Henry V* からの引用。
- (4) Alfred Tennyson の “The Charge of the Light Brigade” からの引用。
- (5) 実際には1939年9月3日、ドイツのポーランド侵攻を受け、イギリス側からドイツへ宣戦布告することとなる。予言的な一節であるが、本書が書かれた1934年当時において、すでにその予兆は感じられていたのだろう。
- (6) William Shakespeare の *Henry VIII* からの引用。
- (7) 新約聖書「ルカによる福音書」11章21節からの引用。有名な「ベルゼブル論争」が行われる場面であり、後に

ここに引用された「武装をした強者」こそが異教の神（悪魔）ベルザブルであることが語られる。ミルンはこれを引用することで、戦争のために武装することを望む軍国主義者をベルゼブルに例え、嘲笑しているのである。

- (8) 新約聖書「マタイによる福音書」22章21節からの引用。パリサイ人が、イエスを支持するユダヤ人たちに前に、支配者である皇帝に納税すべきかを尋ねた際の発言である。ミルンはこの一節を引用することで、キリスト教ではイエス本人によって国王と神の両方に仕えることが認められていると指摘している。

#### 引用文献一覧

- Milne, A. A. *It's Too Late Now: The Autography of a writer*. London: Methuen, 1939.
- . *Peace with Honour*. London: Methuen, 1934.
- . “War with Honour”. Macmillan, 1940.
- 吉村圭. 「A. A. ミルン『名誉ある戦争』」『鹿児島女子短期大学紀要』54 (2018): 139-151.
- . 「A. A. ミルン『名誉ある平和』〈1〉」『鹿児島女子短期大学紀要』56 (2019): 75-86.

(2020年12月25日 受理)